

〔B群〕 アンケート、聴診、胸部レントゲン写真（正面像、側面像）、心電図（安静時、マスターダブル負荷）、断層心エコー検査を行った。

〔結 果〕

〔A群〕 表1、2に示すごとく川崎病既往者は小学生69例、中学生1例であり昭和55年度以降急増している。冠動脈異常を有する者は小学生6例、中学生1例の計7例で既往者に対して10%であった。これら7例はすべて断層心エコー検査で冠動脈瘤の存在が確認され、1例は僧帽弁閉鎖不全雑音を有し、さらに1例は胸部レントゲン写真にて異常石灰化を有していた。心電図検査ではすべて正常であった。〔B群〕 表2のごとく38例中その後の血管造影にて完全に regression している者16例、異常所見を残している者22例である。前者16例中今回の検診にて異常所見を示した者は1例で、負荷心電図にてST低下を認めた。断層心エコー検査にて動脈壁エコー輝度上昇を認めた者が3例存在していた。逆に後者22例中ほとんど異常を認めなかった者が3例存在した。その内1例は、軽度の動脈壁エコー輝度上昇は存在した。後者22例中4例に胸部レントゲン写真にて異常石灰化を認めた。心電図異常は4例で、安静時異常Q波2例、負荷後ST低下2例、負荷後上室性期外収縮出現1例であり、いずれも高度の狭窄、閉塞病変を有する者である。断層心エコー検査にてはほぼ正常の所見しか得られなかった

3例を除き、動脈瘤、動脈壁の不整、狭窄、動脈瘤内血栓、左室壁の動き不整の所見が得られた。聴診にて異常所見は認められなかった。

〔考 案〕

川崎病心血管後遺症児を学童心臓検診において発見する事の重要さは一般に認識されているが、その方法論に確立されたものはない。我々は後遺症を有している者を心臓検診のレベルとほぼ同様の方法で検診を行った。聴診では病的雑音を有する者はいなかったが、学童心臓検診にて僧帽弁閉鎖不全雑音を有する者が存在した事より、この様な雑音を有する者には、リウマチ熱のみならず川崎病の既往を問診する事は重要である。胸部レントゲン写真にて異常石灰化は正面像からはわかりにくく、低電圧による2方向撮影が勧められる。心電図異常は高度の狭窄、閉塞病変を有する者以外、動脈瘤のみでは出現せず Critical な所見と考えられる。ただ今回の検診で完全に regression している1例にST低下が見られたが、この症例に関しては今後検索してゆく予定である。断層心エコー検査はA群において異常者のすべてに positive に所見が出ており、B群においても22例中19例に異常が見られ、最も重要でかつ必須の検査である。ただ今回の検索において何ら所見なく、しかし冠動脈病変を有する者が存在した事は重要であり、これらをも発見する為に今後一層の努力が必要である。

川崎病冠動脈病変の再造影による検討

東京女子医大第二病院小児科 草 川 三 治
 塩 田 康 夫
 多 田 羅 勝 義
 李 慶 英
 東京女子医大第二病院中検 木 口 博 之

〔目 的〕

川崎病罹患児の10~20%に冠動脈瘤がみられる事が明らかにされているが、それら動脈瘤が年余を経た場合どのように変化していくかについてはまだ充分明らかにされていない。そこで当科での冠動脈病変を有する児について再造影を行った結果につき報告する。

〔対 象〕

1973年5月より1982年12月までの9年7ヵ月の間に当科で冠動脈造影を行った312例(男子199名、女子113名)のうち冠動脈瘤、拡大、狭窄、閉塞所見を有していたものは56例(17.9%)であった。これら有所見者のうち再造影を行った23例(男子16名、女子7名)につき検討し

表 1 冠動脈病変あり・再造影例

23例 (男子16人, 女子7人)
発症年齢: 16M±12 (month)
発症後初回造影まで: 11M±19
初回造影より再造影まで: 44M±19

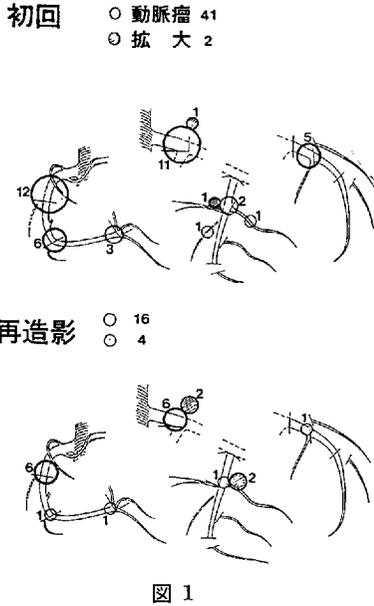
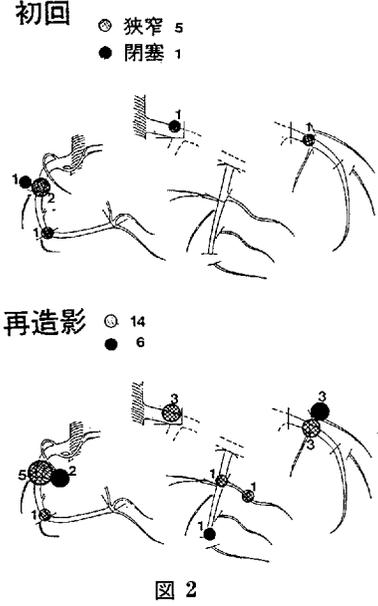


表 2 初回冠動脈病変23例の再造影での変化

悪群 (狭窄性, 閉塞性病変に変化)	10例
不変	6例
良群 (冠動脈瘤の消失したもの)	5例
改善 (冠動脈瘤が一部消失)	2例



た。これら23例の発症年齢は平均16カ月で、発症から初回造影までの期間は平均11カ月であり、初回造影より再造影までの期間は平均44カ月であった(表1)。

〔結果〕

初回造影で動脈瘤は41カ所、拡大は2カ所にみられたが、再造影ではそれぞれ16カ所、4カ所と動脈瘤は縮小していた(図1)。一方、初回造影ですでに狭窄、閉塞病変はそれぞれ5カ所、1カ所にみられたが再造影ではこれらは14カ所、6カ所にみられ増加していた(図2)。

閉塞性病変には5カ所で側副血行路が認められた。これら病変を症例ごとに検討したのが表2であるが、悪群10例中3例には A-C bypass 手術がなされている。

〔考察〕

今回の我々の検討からは、一旦形成された冠動脈瘤は regress していくものもあるが、かなりの部分では狭窄、閉塞性病変に進行し progression するものも多く、冠動脈瘤を有する川崎病罹患児については十分な経過観察が必要である。

川崎病罹患児の遠隔死亡例の検討

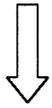
日本大学小児科 大 国 真 彦
宇 佐 美 等

川崎病罹患児の長期予後は明らかでなく、学童期における管理の方針も確立されていない。この一端を知る為

に調査を行った結果、昭和50年以後の5年間に、6才以上の死亡例は19例見出された。川崎病罹患後の期間が不



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔目的〕

川崎病罹患児の 10~20%に冠動脈瘤がみられる事が明らかにされているが、それら動脈瘤が年余を経た場合どのように変化していくかについてはまだ充分明らかにされていない。そこで当科での冠動脈病変を有する児について再造影を行った結果につき報告する。